

けじめある言動がとれるための指導

松 本 享 典

1、対象児について

生徒名 M・Y 高等部三年生（18歳、男）

(1) 生育歴の概要

- ・S. 42. 6. 28生 （長男、第一子）
- ・1才2ヶ月の時、前頭部に裂傷・・・ち癒後、歩行を始める。
- ・幼児期、女の子のようにおとなしく、活発さが無い。
- ・小・中学期、集団行動がとれないという理由で、小2より特殊学級へ入る。
放課後はまっすぐに家へ帰り、外で遊ぶことはほとんどない。
- ・高等部1年（11月）、大発作・・・てんかんと診断を受け、服薬を続ける。
以後、発作は起きていない。

(2) Y男の実態

IQ 50 （WISK、S. 57. 9実施）

基礎的な四則演算や漢字の読み書きができ、断片的ではあるが、一般的な知識もある。知的な興味・関心が高く、中でも歴史の内容を好む。また、素直で物事に工夫して取り組もうとする姿勢も見られる。が、問題点として、①いいわけや不必要に言葉を飾る。②ぎこちない動きをする。③要領が悪く根気が続かない。などがある。

2、目標の設定と指導の方針

Y男自身は普通にやっているつもりのことでも、周囲にはふざけているとかけじめがないとうつることが多い。Y男の将来の姿を考えると、職業自立が可能と思われるが、そのために、人間関係が保たれないことになるようでは、社会へ参加する姿として好ましいものではない。そこで、「けじめある言動がとれる」を目標とし、方針としては問題点①～③の原因として考えられる5つの面の克服及び解消をめざすことにした。

(1) 考えられる原因

- A. 自信のなさ (①、②、③)
- B. 運動量の不足 (②、⑤)
- C. 過度の緊張 (①、②、③)
- D. 状況理解の不足 (①、③)
- E. 自分を良く見られたい気持ち (①、②)

(2) ねらい (配慮事項)

- A. 係活動等をやりぬくことによって自信を持つ。
(自主性を重んじる。責任感を持たせる。)
- B. 部活動等を通して運動する。
(ただし、健康状態をは握し無理をさせない。)
- C. 緊張を和らげる配慮をする。 (※指導者側)
- D. 相手の話や説明をよく聞いて、状況を的確に判断する。
(Y男の目を見て話す。相手の目を見て聞かせる。)
- E. 自分を飾らないで自然に振舞う。
(その都度、指摘する。)

3. 指導の実際

(1) ねらいA に関する指導

前担任からも指導されていることもあり、生徒会長への立候補を勧めるが、一学期は「二学期まで待って下さい。」と言うので立候補を見送り、学級のゴミ捨て係をすることになった。しかし、自分から進んでゴミを捨てに行くことはなく、いつも私が指示してから行動していた。二学期に再度勧めたが、今度は「他にやりたい役があります。・・・学級委員です。」と言う。学級委員は二年時にも経験がありやりぬく自信はあるが、経験のない生徒会長はやりぬく自信がないのだと考えられた。

そこで、学級委員に任命し責任を持たせることにした。当初は、なかなか自主的に行動できなかったが、「○○しなさい。」という言い方ではなく、「○○すればいいなあ。」という言い方で指導をくり返していくうちに、自分が学級委員として行動しなければならない場面がくると、私の顔をうかがって同意を求めだし、私がうなずくの確かめてから行動するようになった。そして、二学期後半頃には、自信を持って自主的に行動できるようになり、他の生徒への連絡や指示も進んで行えるようになってきた。

また、学習発表会において、放送係を担当させることにした。広報委員会に属し、校内放送は経験あるものの、大勢の人の前でしかも父親や母親の前での放送は初めてである。が、生徒会長の時ほどいやがることはなく、素直に引き受けた。当日、手をふるわせながら機器を操作したものの、「次ですね。」と放送場所を担当教師に確認しながら進めていった。後で、やりとげたことを誉めると、とてもうれしそうに「はい。」と答えた。

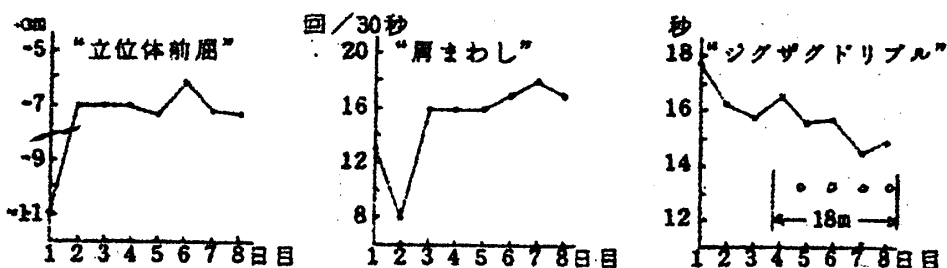
さらに、知的な面の向上も意識して図った。教科単元や学級指導の学習内容に、Y男のレベル（他児より高い）のものを組み入れることによって、授業中のY男の発言を導いたり、知識の幅を広げるようにした。そうすることで、Y男の学習意欲は高まり、日常の生活の中でも少しずつ積極性が顕われ出した。

(2) ねらいB に関する指導

Y男は帰宅後、テレビを見ていることが多い。そこで、部活動への参加を勧め汗を流すことを促した。が、やる気を見せない。そこで、私と一対一で運動することを決め、放課後に取り組んだ。持久走やボール運動を行っていくつもりであったが、帰宅後発熱したり、胃を悪くして通院するようになったため、中断せざるをえなかった。

また、キャンプなどの校外学習や月例の集会で計画されているクラス発表の出し物に、ダンスや踊りを取り入れることにした。他の生徒はダンスをよく好み進んで取り組むが、Y男はクイズのようなものを好む傾向にあった。それを承知のうえで、ダンスを取り入れ運動量を増やそうとしたのだが、リズムに乗り切れずぎこちなさが目立つ結果となってしまった。

下図は、12月に昼休けいを利用してY男の運動能力を測定した結果である。柔軟性があまり変化していないことが分かる。



(3) ねらいC に関する指導

過度の緊張状態を少しでも和らげるために、接し方をできるだけ寛容にした。さらに、場にそぐわない言動をした時も直ちに指摘することは避けてきた。しかし、11月に実施した校内職業実習において、作業中の一日の心拍数を多様途生体測定機(テレメーター)で測定したところ、過緊張の状態が長く続けば心拍数も上がるのではないかと仮定していたが、そのような傾向は認められず、むしろ緊張がゆるむ瞬間があることに気づいた。そこで、緊張を和らげるのではなく、逆に適度な緊張を与えることのほうが、けじめを身につけさせるためにも効果があるのではないかと考え、方針を今までよりも厳しい態度で接することに変えた。以後、この方針を進め現在も試み続けているが、変化はまだ認められていない。

(4) ねらいD・E に関する指導

その都度、今は何をやる時なのか、どういう場面なのかを説明したり、適宜言動が場にふさわしくないことを指摘したりしてきた。しかし、その時はやりなおしたり、その場に応じた言動がとれるが、その時だけで終わっている。

4. 考察と反省

Y男の変化として、少しではあるが積極性が芽生え、失敗してもいいからまずはやってみようとする態度が認められるようになった。その結果として、問題点①の“いいわけ”に関しては減ってきているように思う。しかし、全体的な面で見ると、あまり変化が認められず、目標「けじめある言動がとれる」の達成は、現時点では不十分だと思われる。

私の取り組みで、もっと細かく、もっと的確な場の設定がなされていたら、大きな変化が認められたかもしれない。私のほうから機会を作らず、機会が来るのを待つことが多かったように思われる。また、Y男の言動が場に調和せずユーモラスに感じる時があり、ふと笑ってしまい厳しく対処しないことがあったことも反省している。

今後は、今まで取り組んできた指導 A~E をくり返し行い目標へ一歩でも近づくとともに、Y男がより社会に適應できるように指導していきたいと思う。